

## 令和元年度学校評価結果による課題と改善策

「令和元年度 学校評価の結果と状況分析」を踏まえ、学校評価委員会として次年度に向けた課題と改善策を以下のように検討した。

課題 1 進路	<p>昨年、キャリア教育全体計画を作成したが、今後、各学部において段階的・継続的な指導計画、実践に活用されていくことが期待される。また、卒業後、進路先にスムーズにつながるためのツールとして「個別の移行支援計画」の必要性を訴える意見もあるが、すでに様式が存在することから、活用の在り方を含めて検討していくことが求められる。</p> <p>保護者も低学年になるほど、まだ先の話として捉える傾向がうかがえる。また、高学年になるほど、保護者は実習先、進路先に関することや実習を決定するまでのプロセス、福祉サービス利用の手続き等に関心を寄せており、多様な進路に関する情報を求めている。</p> <p>ばんだい荘職員からは実習の時期や交通手段及び実習に係る事前の準備に対する問題が指摘されているが、実習先を決定するまでのプロセス、実習を迎えるまでの準備といった面で、今後も連携を密にしていく必要がある。</p>
改善策	<ol style="list-style-type: none"> <li>① キャリア教育全体計画の活用について再確認し、計画に基づいた学習計画の作成及び実践を推進する。</li> <li>② 進路先に提供される資料に関する活用の在り方を検討し、次年度卒業生の情報提供に役立てる。</li> <li>③ ホームページなどを活用して、積極的に進路に関わる情報の提供を行う。</li> <li>④ 実習の調整段階からばんだい荘との連絡を密にして、保護者、ばんだい荘、学校の三者が合意の上、実習に臨むことができるようにする。</li> </ol>
課題 2 連携	<p>今年度の取り組みとして、情報のすれ違いがないように、校内及びばんだい荘、学校間で頻繁かつ重層的に連絡を取り合うなどして連携を図ることができた。</p> <p>しかし、ばんだい荘職員からは教員の児童生徒に対する敬称について疑義が指摘されるなど、福祉と教育といった立場の違いからくる視点、考え方の違いや勤務体系や指導体制の違いなどから、お互いにすれ違ってしまいうところがまだあるのではないと思われる。</p> <p>また、保護者からは高等部において、より生徒の能力に応じた関わり方を求める意見が出されており、教員は再度、関わり方について再検討するとともに、保護者に対しては生徒への関わり方の意図や考えを丁寧に説明し、理解いただけるように努力しなければならない。</p>
改善策	<ol style="list-style-type: none"> <li>① ばんだい荘、学校の職員、教員同士が共に学びあう機会や交流、親睦を図る機会について協議、実践する。</li> <li>② 学級担任は学級懇談や個別懇談において、生徒との関わり方の意図や学部、学級の指導方針などを丁寧に説明し、保護者と共通理解のもと指導、支援できるようにする。</li> </ol>
課題 3 センター	<p>今年度の取り組みとして、地域支援センター通信「はあとふる」の発行は計画通りに行うことができた。新たな取り組みとして、本校保護者を対象に保護者同士や教員と気軽に話ができる「はあとふるタイム」を実施して、好評であった。出かける支援も今年度は高等学校からの支援要請が増え、センター的機能として十分発揮されていたと考える。</p> <p>しかし、直接、センター的機能の発揮に関係している教員はセンターの係として所属している一部の教員のみであることが現実で、教員全体としての関心度が比較的低迷している。本校教員全員がセンターの一員であることを自覚し、本校のセンター的機能がどのように発揮されているのか、関心をもつことが重要である。</p>
改善策	<ol style="list-style-type: none"> <li>① 地域支援センターはあとふるは、センター的機能の発揮状況についてさらに充実した広報に努めるとともに、教員は関心をもって情報を受け止めながら、実施状況を理解し、各部・各委員会等でセンター的機能をどのように発揮できるか検討する。</li> </ol>